

唯研草創期（1978～89年）の市民と階級——パラダイム転換への苦闘

小池 直人

はじめに

報告の限定：唯研草創期の十年

大転換の時代の直前：近代市民社会の資本主義的文明化の全面展開、89年：昭和天皇の死去、ペレストロイカから旧社会主義体制の崩壊へ、日本文化論、ポスト・モダン論の隆盛、他方でブルジョワ社会の拡大展開期、戦後型マルクス主義（唯物論）のヘゲモニー喪失のなかで、新しい解放的思想への模索と苦闘。

Cf. 中曽根政権の登場で「行革」がスタート、労働組合攻撃のエスカレート・・・、ネオリベ批判、格差・貧困問題批判はまだ本格化していない。

一 基底体制還元型思考の終結——『唯物論研究』の変化

『唯物論研究』1979年に創刊号、84年まで年2回、11号。

湯川委員長の創刊の辞（79/11）秋間委員長の創刊の辞（85）：

現実問題に複眼的に接近、自由で根本的な発想を堅持し、人権と民主主義を共通理念とする。

吉田傑俊論文「現代文化としての戦後思想問題」（『唯物論研究』1982、6号）

戦後の岐路、唯物論が規範的であり現実内在的であるためには、立場の一貫性とともさまざまな民主主義思想家との「思想上の共同（Mitdenken）」が必要。

➡ 全体として、批判的思想のパラダイム転換：民主主義共同戦線の模索

① 体制機軸型から問題解決型へ

社会主義体制の人権抑圧、近代市民社会のブルジョワ化

（マルクス主義と近代主義の連携から両者の乖離）

栗田賢三論文：「現代の危機とマルクス主義」（資本主義を乗り越えた「社会主義工業文明」（1981、4号）

芝田進午論文：「唯物論と民主主義」（1980、2号）

核時代に「唯物論は民主主義の友」でなければならない

➡ 唯研の自己修正：体制の優位から、問題解決の優位へ（創刊の辞）

浜林正夫論文：「歴史における進歩とは何か」（1984）で史的唯物論の自己修正

社会主義諸国の問題の顕在化、生産力を含むヨーロッパ中心主義の見直し

二 イデオロギーからアントロポロジーへ

『思想と現代』（85年から96年、季刊40号）

秋間委員長、湯川創刊の辞の継承発展しかし、全体の論調は『唯物論研究』とかなり異なる。人間の危機、環境危機といった関心が前面に出る（階級問題は直接的には目立たない）。1980年代末ですでに、現代にストレートにつながる。

② 対抗的人間学（アントロポロジー）

創刊号の特集テーマ「人間の解体」（85）

日本型経営、日本文化論（階級の否定と労資協調主義）、「柔らかい（社交型）個人主義」

➡日本文化論、消費、欲望論、親密圏論の批判的構築

・批判的市民社会論

佐藤和夫論文「人間が見えない文化」(1985、創刊号)

「人間の自立を根本とするのか、新しい共同のあり方のダイナミックな模索を根底にするのか」家族、男女関係、性、フェミニズム、親密圏の批判的探求

cf. 尾関コミュニケーション論(「言語・コミュニケーション、人間」唯物論研究3号、1980)

③ 国家イデオロギーの再把握

渡辺治論文「現代日本国家論の課題」(1983年、第10号)

対米従属下の帝国主義的復活：保守化、国家支配礼賛のナショナリズムの論拠を半封建でなく、資本主義経済成長による生活向上に求める。開発独裁国家的性格の資本主義的性格の解明と批判へ。

高田求論文「倒すべきものとしての国家、つくるべきものとしての国家」(同上)

批判方法。 ➡ 90年代以降の新福祉国家論へ

④ 日本型ポスト・モダンの相対主義

浦地実論文「<ポスト・モダン>と唯物論」(85. 2号)

問題提起はよいが、思想原理が曖昧で、状況に応じて「ブレる」思想の可能性。

Cf. 仲本章夫、松井正樹、司会者の座談会「理性では古いのでは？」(85. 3号)

⑤ 西欧マルクス主義の遺産

西欧マルクス主義から何を学んだか

福山隆夫論文「物象化概念と現代世界」(1989、18号)

ルカーチに端を発する合理化批判、物象化批判の意義：環境、生活、コミュニケーション論へ

この枠組みを吸収しつつ、どう批判的思想を再建するか(ソ連型社会主義の崩壊が拍車)

おわりに

1980年代末の議論は、批判の再構築において安定してきた印象、ネオリベ批判はないが、それに繋がり今日の議論との連続する。

➡全体の印象、①この時代の唯研の幅広さ、②苦闘の時代、③エネルギーを感じる現代はその逆、矛盾の顕在化、批判主体の脆弱さ！！ →唯研の役割と可能性